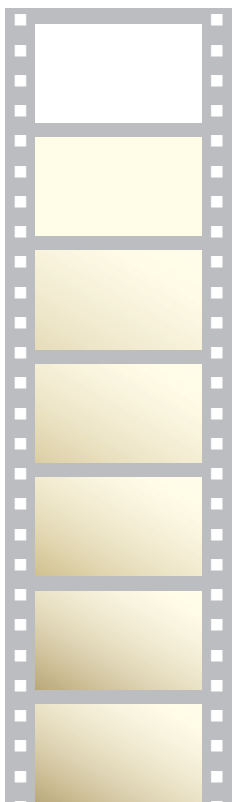


伸<sup>ノブ</sup>さんのシネマトーク

鈴木 伸夫





## 第十六回 「ロードムービーのような旅」

父と映画の関係はとても近い位置にあつたのです。ぼくが小学一年生になる前、父は愛知県豊橋市のM製菓出張所長を命ぜられ、家族とともに赴任しました。昭和29年春のことでした。その時は小樽市の出張所長だったので北海道小樽市から愛知県豊橋市まで約千五百キロの旅を家族4人でしたのです。ぼくも東京支社へ転勤した経験がありますが、転勤は出張旅費が片道切符代しかもらえず、何かさみしくシヨックな気持ちになつたものです。

しかし、6才の時、体験した父の長い転勤の旅のなかで、はつきり覚えていることが3つあります。旅の始まりは小樽。小樽から函館へ、函館から青函連絡船に乗り青森へ向かいました。およそ3時間50分の船旅は正直いつて退屈でした。そこで、船内の探検に出かけたのです。季節は弥生三月、津軽海峡はまだ冬景色、海は風雪で荒れていました。デッキには人影もなく、自分で開けたドアなのに開かなくなつ

たのです。「これは大変だ。このままここにいと死んでしまうぞ！」と考えたぼくは半べそをかきながら大人が来てドアを開けるのを待つしか方法がありませんでした。希望は持つものです。一時間はかかりませんが、ぼくにとつて、最大の長い時間が経った時、その重いドアを開けた人とタイミングよく船内へ入ることに成功し、やっとぬれた衣服を乾かすことができたのです。

2つめは、青森駅から乗った夜行列車のなかでの話です。寝台列車は昭和29年春には走っていたかと思いますが、ぼくたち家族4人はなぜか椅子席に座っていました。

東北本線上りのSL（蒸気機関車）は、翌朝、東京の上野駅に着く予定で走っていました。列車内は終着駅まで乗車する人は少なく、空席のボックスがあり、家族はそれぞれ楽な体勢で休んでいました。母は姉と、父はぼくと、同じボックスでした。何時頃だったでしょうか、列車が急停止したのです。まだ身体の小さなぼくは、ボックスのアベックシートに横になっていましたが、急停車のほずみで床に投げ出

されたのです。それまでぐっすり眠っていたのに、全身で起こされたのは初めてで、家族や周りの人たちが心配してくれたことを覚えています。幸いけがなく済みましたが「もしも打ち所が悪ければ」と、いまから考えれば、「ゾッ！」とする思いです。

夜が明け、朝が来て、明るくなっても頭の中がまだはつきりしない時、車内販売で「みそ汁」を売りに来ました。煙たいSLの座席で一晩休んだといっても身体の疲れは取れていないものです。「みそ汁」の具は忘れましたが、家族全員で飲んだあの「みそ汁」の温かい味と香りは旅の途中の疲れを癒してくれた最高の飲み物でした。

主人公が車や列車などで移動するとともに話が展開していく映画のことを「ロードムービー」といいますが、自分の旅を思い出しながら気がついた日本映画がありました。

九州、長崎の小さな島を出て、北海道の開拓地へ向かう5人家族の姿を描いた「家

族」(70年製作・山田洋次監督・出演・井川比佐志、倍賞千恵子)という作品です。  
機会があればぜひひごろん下さい。

(続)  
伸

平成23年3月